

## 毘沙門様のお守りが泥棒を捕えた話

今泉新田の仙蔵どん達一行五人は、お伊勢参りの四十日の長い、長い旅に立ち、いよいよ明日は伊勢参りができる、亀山の町に宿をとった。宿は大変こんで、ノッポとチビの二人の旅人との合い部屋で、七人が一つ部屋にねることになりました。

一行の五人は、夕飯にお酒をお銚子一本を飲んで、旅のつかれもあって高いびき。

翌朝、六時半に起きて、ふとんをあげて驚いた。枕の下に入れておいた財布が、五人中三人がなくなっているので大さわぎ。

合い部屋のノッポとチビは、夜が明けぬ中に宿を出た立ったという。「さてはあの二人が」とさわいでみても、それは後のまつりだ。

そこで仙蔵どんは、持ってきた故里の新田の毘沙門様のお札を宿の床に立て、一心におがんだんだよ、そしたら耳もとで「大阪の生駒の毘沙門様に、先に参れ！」という声

がきこえたので、一同は相談をして生駒の毘沙門様へお参りするため、鈴鹿の峠道にさしかかった。ところが、峠の道ばたに、ノッポとチビの二人が抱き合うようにして、すくだまっている。五人は、「枕探しの泥棒野郎！」と肩を押えて、つかまえた、そしたら、ノッポの男は、どもりながら「すみません、すみません、悪い事はできません。ぬすんだ財布の一つに入っていた恐ろしいお姿の神様を見た。とたんに、二人は震えだし、口もきけず、手も動かず、どうにもならなくなったんでござえやす。財布は全部返しやす。どうか生命だけは、お助けくださいんせー、へえーこのとおりでござえやす」と頭を地べたにすりつけて手を合せてあやまりましたとさ。

